

井尻B遺跡 21

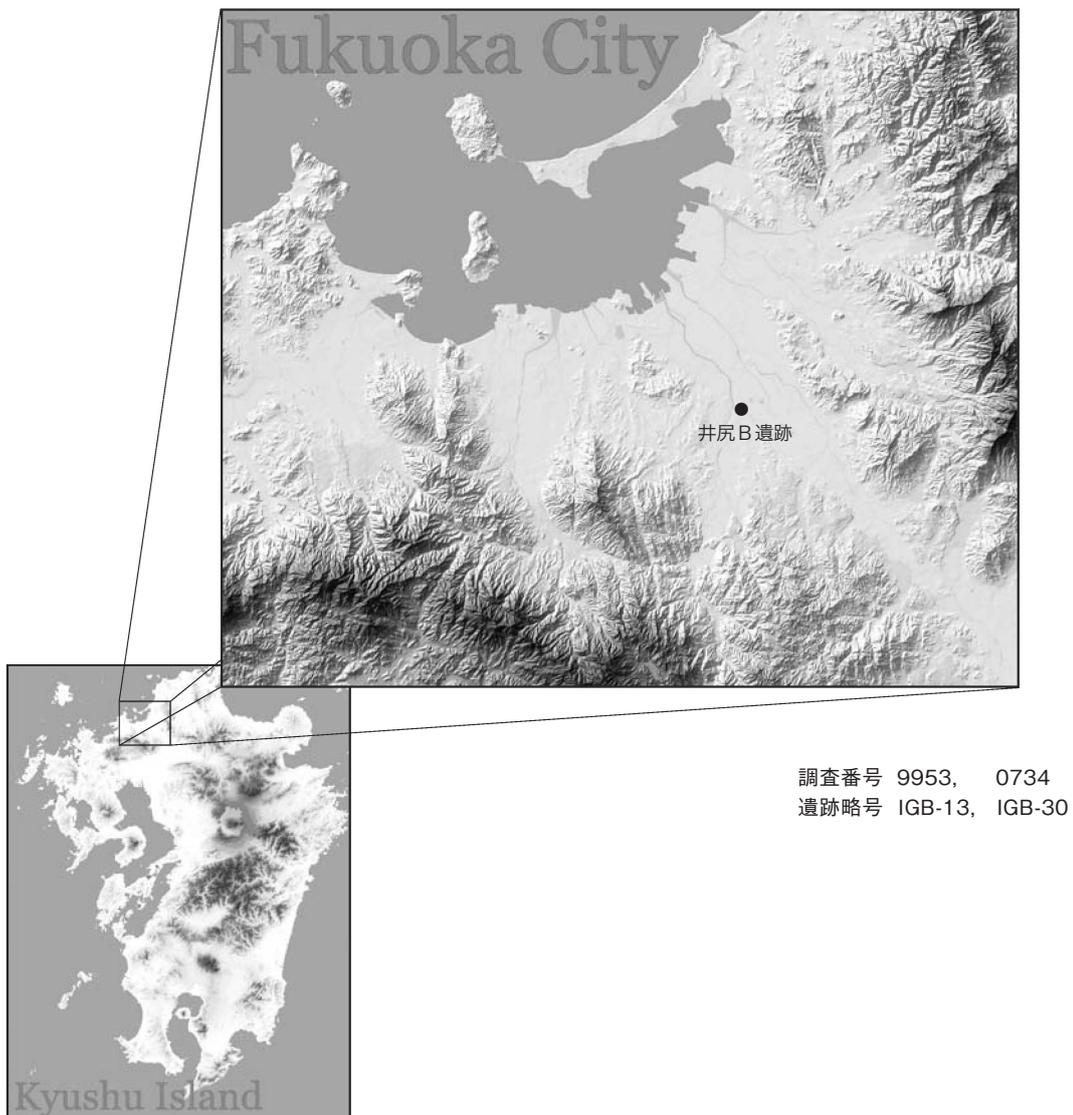
－ 第13次,第30次調査の報告－

2014

福岡市教育委員会

い じり 井尻 B 遺跡 21

－ 第13次, 第30次調査の報告 －



2014

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむを得ず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回、井尻B遺跡の発掘調査による多くの貴重な成果を報告することができることとなりました。本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、地権者の皆様をはじめとした地域の皆様、そして関係各位のご理解を賜り、多大なるご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月 24 日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例言

- (1) 本書は福岡市教育委員会が、井尻B遺跡において実施した発掘調査のうち、福岡市南区井尻一丁目755-8で発掘調査を実施した第13次調査と福岡市南区井尻五丁目143-17で発掘調査を実施した第30次調査の発掘調査報告書である。
- (2) 第13次調査の写真撮影、遺構の実測・製図は佐藤一郎が、遺物の実測・製図は土器を埋蔵文化財調査課技能員の上方孝弘、石器の実測は同立石真二、製図は上方が行った。第30次調査の写真撮影、遺構、遺物の実測は加藤隆也が行った。
- (3) 第13次調査の遺物の整理は整理補助員の古賀美江・小畑貴子が行った。
- (4) 本書で用いる方位は磁北である。また、第30次調査で使用している座標は日本測地系である。
- (5) 遺構は2桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSC(竪穴住居)、SB(掘立柱建物等)、SD(溝)の略号を番号の前につけた。
- (6) 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- (7) 本書の執筆は佐藤・加藤が行った。

第13次調査

遺跡調査番号	9953	遺跡略号	IGB-13
所在地	南区井尻1丁目755-8	分布地図番号	25-0090
開発面積	84.9㎡	調査面積	60㎡
調査期間	平成11年11月22日～平成11年12月11日	事前審査番号	11-2-404

第30次調査

遺跡調査番号	0734	遺跡略号	IGB-30
所在地	南区井尻5丁目143-17	分布地図番号	25-0090
開発面積	129㎡	調査面積	129㎡
調査期間	平成19年9月4日～平成19年9月28日	事前審査番号	19-2-342

目次

I 井尻B遺跡の位置と周辺の歴史環境	1
II 第13次調査の記録	5
1. 調査に至る経緯と調査の組織	5
2. 調査の概要	6
3. 遺構と遺物	8
III 第30次調査の記録	15
1. 調査に至る経緯と調査の組織	15
2. 調査の概要	15
3. 調査の記録	17
4. まとめ	23

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 井尻B遺跡既存調査位置図 (1/4,000)	3
Fig. 3 井尻B13次調査地点遺構配置図 (1/100)	5
Fig. 4 竪穴住居 (SC) - 01 遺構実測図 (1/50)	6
Fig. 5 SD - 02他 出土遺物実測図 (1/4)	7
Fig. 6 SC - 01 出土遺物実測図1 (1/4)	9
Fig. 7 SC - 01 出土遺物実測図2 (1/4)	10
Fig. 8 SC - 01 出土遺物実測図3 (1/4)	11
Fig. 9 SC - 01 出土遺物実測図4 (1/4)	12
Fig. 10 第30次調査地点図 (1/500)	15
Fig. 11 第30次調査遺構配置図 (1/80)	16
Fig. 12 竪穴住居 (SC) - 01・02 遺構実測図 (1/40)	18
Fig. 13 竪穴住居 (SC) - 03・04 遺構実測図 (1/40)	19
Fig. 14 掘立柱建物 (SB) - 01・02 遺構実測図 (1/60)	20
Fig. 15 竪穴住居 (SC) 出土遺物実測図 (1/3)	21
Fig. 16 土壌 (SK) - 01・02, 不明遺構 (SX) - 01 遺構実測図 (1/40)	21
Fig. 17 SK - 01 出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig. 18 ピット状遺構 (SP) 出土遺物実測図 (1/3)	23

I 井尻B遺跡の位置と周辺の歴史環境

井尻B遺跡は福岡平野の中央部を南北に貫流する御笠川と那珂川にはさまれた洪積台地、中位段丘上に位置し、南北900m、東西400mの広がりをもっている。阿蘇山の火砕流の堆積物からなる一連の台地上には、北側から比恵遺跡群、那珂遺跡群、五十川遺跡、井尻B遺跡、諸岡A・B遺跡、麦野A・B・C遺跡が立地している。井尻B遺跡が位置する地域は古代以降、那珂郡に属し、明治22年曰佐村の大字となり、昭和29年に福岡市へ編入された。地名の起源は続風土記による万葉集に見える伊知郷に由来する説があるが、定説までには至っていない。

井尻B遺跡では現在までに40次にわたる発掘調査が行われており、旧石器～中世にかけての遺物・遺構が発見されている。今回報告する第13次調査地は井尻B遺跡の北部に位置する。隣接する北西から南東にかけては市道御供所井尻線開設に伴う第17次調査(C区)が行われ、弥生時代中期初頭の竪穴住居跡・井戸・貯蔵穴、後期中頃～終末の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝、古代の道路状遺構、中世の溝などが検出されている。小型倣製鏡、小銅鐸、ガラス勾玉鋳型など特筆される遺物が出土している(福岡市埋蔵文化財調査報告書918集)。北東100mに位置する第4次調査では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居跡、後期中頃の井戸、中期後半の土坑などが検出されている(同412集)。北西20m、御供所井尻線に隣接する第18次調査では弥生時代の竪穴住居跡、後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居跡などが検出されている。北東50mに位置する第25次調査では弥生時代中期前半～末の竪穴住居跡、中期前半以前の木棺墓などが検出されている。

今回続いて報告する第30次調査地は井尻B遺跡の中央東端に位置する。南100mに位置する第6次調査では弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土坑などが検出されている。小型倣製鏡、銅鏃鋳型の出土は特筆される(同529集)。その南側に隣接する第12次調査においても弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡が検出されている(同645集)。そのさらに南側に隣接する第28次調査では弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡・溝が検出されている。

南南西100mに位置する第2次調査では弥生～古墳時代の掘立柱建物跡・土壙墓・古墳が検出されている(同175集)。その西側に隣接する第5次調査では埴輪を伴う円墳が検出されている(同130集)。



- | | | | | |
|------------|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 井尻B遺跡 | 2. 比恵遺跡群 | 3. 那珂遺跡群 | 4. 雀居遺跡 | 5. 那珂君休遺跡 |
| 6. 板付遺跡 | 7. 高畑遺跡 | 8. 諸岡A遺跡 | 9. 諸岡B遺跡 | 10. 五十川遺跡 |
| 11. 井相田C遺跡 | 12. 笹原遺跡 | 13. 三筑遺跡 | 14. 麦野A遺跡 | 15. 麦野B遺跡 |

Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)



Fig.2 井尻B遺跡既存調査位置図(1/4,000)

表1. 井尻B遺跡調査一覧

調査回数	調査番号	調査年	所在地	調査面積 (㎡)	報告書	遺跡の概要	主な出土遺物
第1次調査	8124	1981	井尻1丁目111-1外	600	111	土壇, 溝, 水溜状遺構	丸・平瓦
第2次調査	8610	1986	井尻5丁目175-1	930	175	旧石器, 弥生～古墳; 掘立柱建物, 土壇墓, 古墳	細石刃, 石核, ナイフ形石器, 円筒埴輪, 家形埴輪, ガラス小玉
第3次調査	9201	1992	井尻1丁目293-1・2外	1,060	411	弥生～古墳; 住居跡, 井戸 古代; 住居跡, 溝	碧玉勾玉, 鉄斧, 百済系軒丸瓦
第4次調査	9335	1993	井尻1丁目747-1	390	412	弥生後期～古墳初頭; 住居跡, 掘立柱建物, 井戸, 土壇	
第5次調査	9408	1994	井尻5丁目171-3	130	441	古墳; 円墳	円筒埴輪, 家形埴輪, ガラス小玉, 鉄剣, 鉄刀
第6次調査	9501	1995	井尻4丁目170, 171-1	800	529	弥生後期～古墳前期; 住居跡, 掘立柱建物, 井戸, 土壇	小型仿製鏡, 銅鏃鑄型, ガラス小玉
第7次調査	9520	1995	井尻1丁目363-2外	69	年報 Vol.10	古代?ピット, 土壇	土器
第8次調査	9667	1997	井尻1丁目13番地内	113	571	弥生～古代の遺物包含層	
第9次調査	9745	1997	井尻5丁目6-33	132	678	弥生後期; 住居跡	
第10次調査	9758	1997	井尻1丁目27-13	153	678	弥生～古墳; 溝 古代; 掘立柱建物	百済系軒丸瓦
第11次調査	9809	1998	井尻1丁目13番地内	690	644	弥生中期～古墳初頭; 井戸, 土壇	銅矛鑄型, 銅鏃, 鐸形土製品
第12次調査	9865	1999	井尻4丁目170-1外	125	645	弥生後期～古墳初頭; 住居跡, 掘立柱建物	細石刃核
第13次調査	9953	1999	井尻1丁目755-8	60	本報告		
第14次調査	9958	1999	井尻1丁目13番地内	952	736	弥生; 掘立柱建物 古墳; 井戸	銅鏃鑄型
第15次調査	9965	2000	井尻1丁目362-3	36	年報 Vol.14	中世; 溝	
第16次調査	0004	2000	井尻1丁目729-1	132	721	弥生中期; 甕棺墓, 土壇墓, 土壇	
第17次調査	0027 0090	2000	井尻1丁目地内	3,657	787 834 918	弥生後期～古墳前期; 住居跡, 掘立柱建物, 井戸, 土壇, 甕棺墓	小型仿製鏡, 小銅鐸, ガラス勾玉・銅戈鑄型
第18次調査	0028	2000	井尻1丁目757-3	186	年報 Vol.15	弥生中期～古墳初頭; 住居跡, 井戸, 貯蔵穴, ピット	石鎌, 刀子, 管玉, ガラス玉
第19次調査	0043	2000	井尻5丁目12-32	133	年報 Vol.15	古代?溝	瓦
第20次調査	0116	2001	井尻1丁目283-1	69	年報 Vol.16		土器
第21次調査	0126	2001	井尻5丁目9-2外	366	788	弥生; 甕棺墓, 住居跡, 土壇, 溝 古代; 溝	
第22次調査	0133	2001	井尻1丁目735-5	141	923	弥生, 古代, 中～近世; 掘立柱建物, 土壇, 溝	
第23次調査	0474	2004	井尻5丁目163-3	22	年報 Vol.19	ピット	
第24次調査	0489	2004	井尻5丁目163-1外	66	年報 Vol.19	弥生; 柱穴 古代; 土壇, 溝	
第25次調査	0613	2006	井尻1丁目754-2外	80		弥生前期?; 木棺墓 弥生中期; 住居跡	土器
第26次調査	0629	2006	井尻1丁目87番1	614	973	中世; 水田跡	
第27次調査	0641	2006	井尻1丁目763-3外	133	1136	弥生後期; 掘立柱建物, 土壇, 甕棺墓, 土壇墓	土器
第28次調査	0658	2006	井尻4丁目170-12	241		弥生末～古墳初頭; 住居跡, 溝	家形埴輪
第29次調査	0668	2006	井尻5丁目175-1	87		弥生; 土壇墓 弥生～古墳; 溝, 土壇	土器
第30次調査	0734	2007	井尻5丁目143-17	129	本報告		
第31次調査	0765	2007	井尻5丁目160-6	103.5		弥生時代中期～後期	
第32次調査	0849	2008	井尻1丁目712番7	98.2		弥生中期～後期; 住居跡, 掘立柱建物, 土壇, 井戸	瓦, 石器, ガラス, 鉄器
第33次調査	0859	2008	井尻1丁目305番16	37		弥生, 近世; 溝	土器, 陶器
第34次調査	0924	2009	井尻4丁目815-1, 822	485	1106	弥生中期～後期; 甕棺墓, 土壇墓, 土壇, 溝	土器
第35次調査	0938	2009	井尻1丁目764番2	61		弥生中期～後期, 古代; 住居跡, 溝	土器
第36次調査	1112	2011	井尻1丁目728番2	175	1217	弥生中期～古墳前期; 溝, 柱穴	土器
第37次調査	1203	2012	井尻4丁目	530	1218	旧石器時代遺物包含層 古代; 溝	石器, 瓦
第38次調査	1215	2012	井尻5丁目160番12		1219		
第39次調査	1309	2013	井尻4丁目172番12	57.2		ピット	土器
第40次調査	1332	2013	井尻4丁目167番2	200		弥生終末～古墳初頭; 住居跡	土器

Ⅱ 第13次調査の記録

1. 調査に至る経緯と調査の組織

1999（平成11）年9月7日付けで個人から福岡市埋蔵文化財課に福岡市南区井尻一丁目755-8の個人住宅建築に伴う埋蔵文化財事前調査申請書（11-2-404）が提出された。申請地は周知の文化財である井尻B遺跡のやや北側、中央部に位置する。都市計画道路御供所井尻線予定地に個人住宅の南西半分がかかり、解体後に道路に隣接する北東部分にRC造3階建ての個人住宅を建替える計画である。既存建物解体後の1999（平成11）年11月11日に試掘調査を行い、現地表面から0.7mの深さで遺構が確認された。確認調査の結果とRC造建物の基礎設計図を照合したところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が免れないため、やむを得ず建設に先立ち記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。協議を重ねた結果、1999（平成11）年11月22日から12月11日までの期間で調査を行った。調査期間中は事業主から作業員休憩場所やトイレ、水道の提供を得た。

発掘調査主体
福岡市

発掘調査（平成11年度）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
課長 山崎 純男
調査第2係長 力武 卓治
事前審査担当 杉山 富雄（主任文化財主事）

整理・報告（平成25年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課
課長 佐藤 一郎（主任文化財主事）
事資料整理 加藤 良彦
課長 宮井 善朗
調査第1係長 常松 幹雄
調査第2係長 榎本 義嗣

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

試掘調査は埋蔵文化財課事前審査担当の杉山・加藤が行った。調査・整理の庶務は文化財部埋蔵文化財課（平成11年度）の御手洗清・埋蔵文化財審査課管理係（平成25年度）の横田忍が行った。

発掘作業員 大崎宏之・尾花憲吾・
為房紋子・播磨博子・山口慶子・萬
スミヨ

整理作業 古賀美江・小畑貴子

また、事業主、建築設計事務所、地元井尻一丁目町内の方々のご協力により、井尻B遺跡第13次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表す。

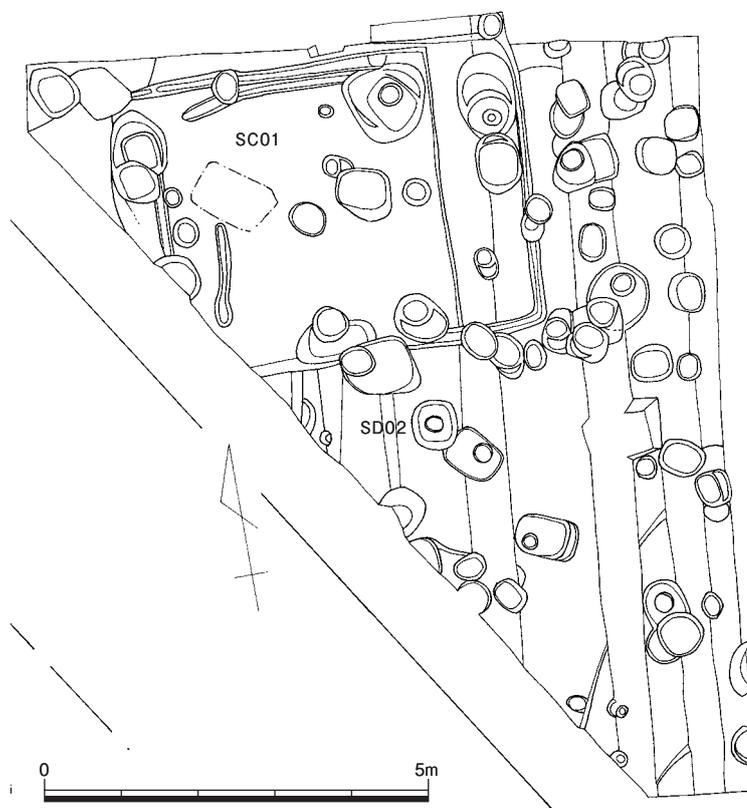


Fig.3 井尻B13次調査地点遺構配置図(1/100)

2. 調査の概要

発掘調査の経過

1999（平成11）年11月22日に表土剥ぎ、残土は南側の調査対象外の空き地に置くこととした。11月23日から作業員を投入し遺構検出を開始した。調査は個人住宅建設部分を対象とし、現況は木造家屋で、バックホウで現地地表下50cmの盛土、および20cmの耕作土を除去し、地山のローム層上面で遺構を確認した。後世の開墾により地山は西に向かって低くなり、緩斜面をなす。西へ行くに従って削平が著しく、検出した竪穴住居跡の南西側の壁は失われている。検出した遺構は弥生時代後期前半の竪穴住居跡1、弥生時代中期の柱穴70、中世前半（12世紀）の溝1である。柱穴群は掘立柱建物、竪穴住居跡床面の柱穴を構成するものとみられるが、調査区域が狭小で、削平により竪穴住居の壁が失われ、建物全体の規模の復元は困難である。12月3日に全景写真撮影、12月6日までに遺構の完掘、実測、12月11日に埋め戻し、発掘機材の撤収を行った。

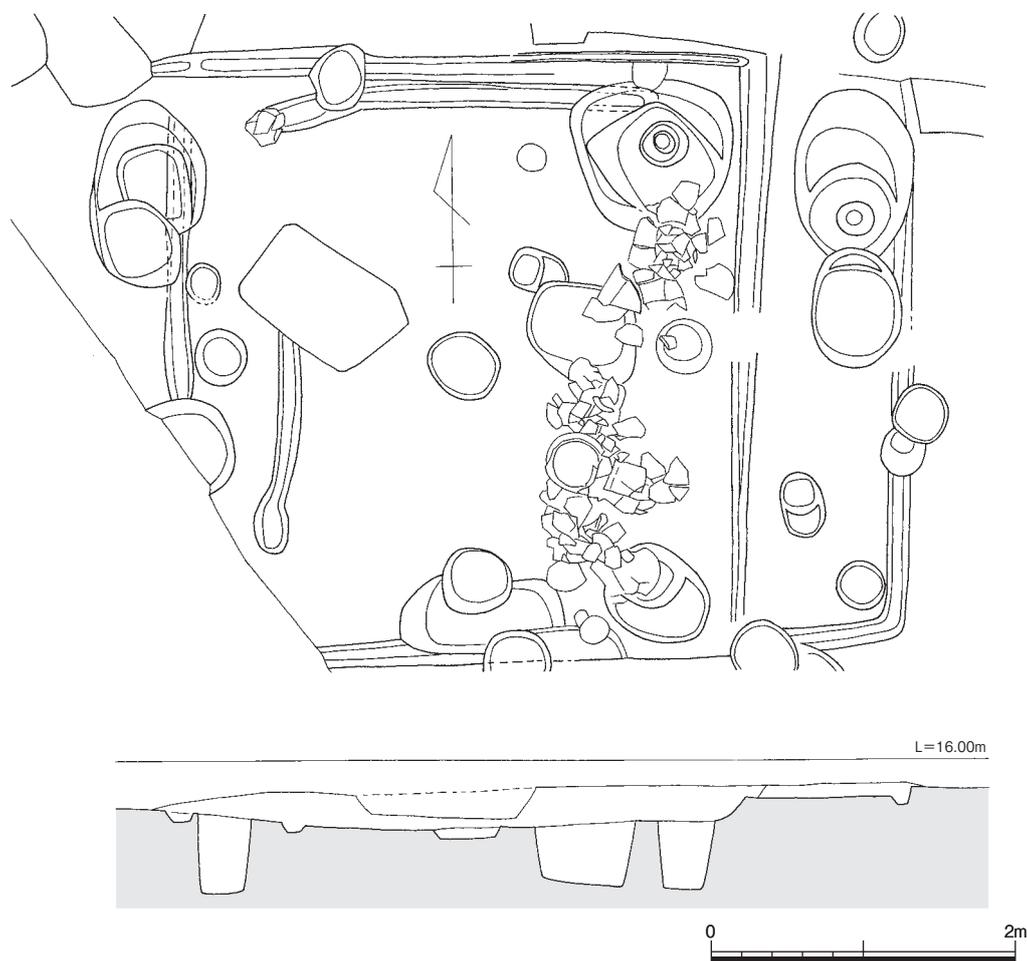


Fig.4 竪穴住居(SC)-0 1 遺構実測図(1/50)

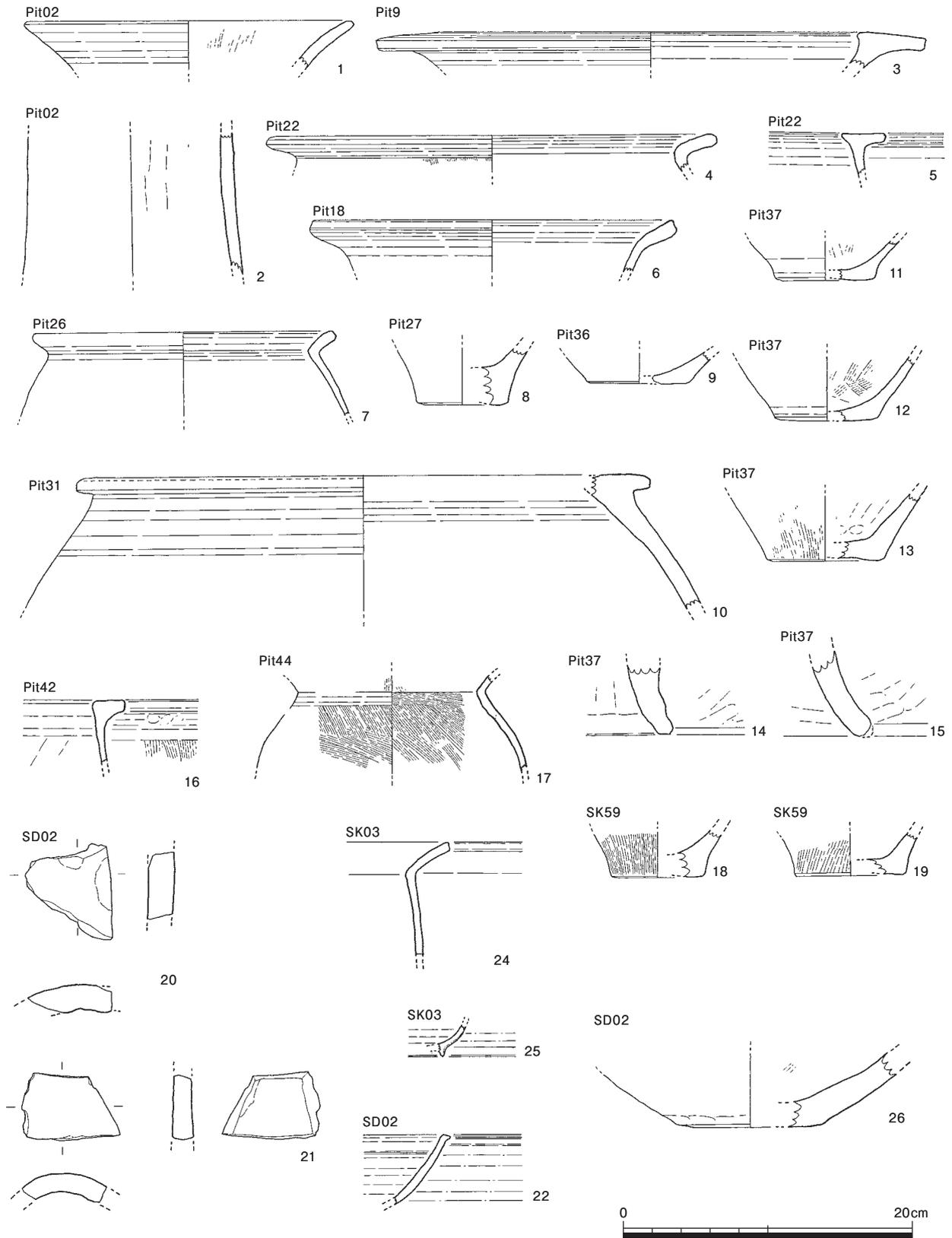


Fig.5 S D-0 2 他 出土遺物実測図(1/4)

3. 遺構と遺物

検出遺構

(1) 竪穴住居跡 S C 0 1 (Fig.4)

調査区の北側で検出された長軸を東西方向に向ける長方形住居跡である。住居の西側は後世の削平により失われている。住居の東壁に沿ってベッド状施設を配する。元は東西に対置して配され、西側にも同様な施設があったと推測される。中軸線上に支柱穴 2 と中央に円形炉を切る。ベッド状施設の西側でまとまった量の土器が出土した。住居は北壁 5m 以上、東壁 4m を測る。床面中央の炉から折り返し場合、復元される東西長は 5m を測る。外周の壁下に沿って壁溝を巡らしている。東壁側のベッド施設は幅 1.0 m、床面との比高 20cm を測る。支柱穴は軸線上に 2 個配され、掘り方は径 35cm の不整円形をなし、深さ 50cm を測る。両支柱穴の心々距離は 3.0m を測る。炉跡は径 40cm の不整円形をなし、深さ 5cm を測る。焼土や灰はほとんどみられなかった。

(2) 溝

S D 0 2 (Fig.3)

調査区の中央部で検出された南北溝で、幅 1.0m、深さ 0.15 ～ 0.2m を測る。S B 0 1 上面では掘り方を明瞭に検出することができなかった。調査区内では 2.5m 検出したが、溝底の比高差は検出した範囲ではなく、標高は 12m を測る。

出土遺物 (Fig.5 ～ 9)

ピット状遺構・柱穴出土遺物

1・2 は器台で 1 は口縁部片、2 は胴部片である。Pit02 出土。3 は大型壺の鋤先状口縁部片である。Pit02 出土。4 は甕の緩やかに外方に延びる口縁部片、Pit22 出土。6 は朝顔形に開く甕の口縁部片で、端部が肥厚する。Pit18 出土。7 は甕の「く」の字形に屈曲する口縁部片である。Pit26 出土。8・9・11～13 は底部片である。8 が Pit27、9 が Pit36、12・13 は Pit37 出土。10 は大型の甕棺上半部片で、Pit31 出土。14・15 は器台の裾部片で指オサエ、指ナデ痕が残る。Pit37 出土。16 は小型甕口縁部片で、Pit42 出土。17 は甕の頸部から胴部上半にかけての破片で、内外面とも頸部はハケ目後横ナデ、胴部上半はハケ目を施す。Pit44 出土。18・19 は平底の底部片である。Pit59 出土。

S D 0 2 出土遺物

20・21 は丸瓦片で、凸面はナデ、凹面には布目痕が残る。焼成は須恵質である。

22 は白磁碗 V-4 類口縁部片である。

S K 0 3 出土遺物

24 は緩く「く」の字形に屈曲する甕の口縁部片、25 は肥前系磁器底部片である。

S B 0 1 出土遺物

27 は球形の胴部に短く外反する口縁部がつく弥生土器壺で、口縁下に断面▽形の突帯を巡らせる。口径 21.9cm、器高 40.8cm、胴部最大径 32.9cm、復元底径 11.4cm を測る。

28 は杓形器台で、嘴状の突起は欠失している。

29～31 は半球形の椀で、29 は口縁端部が横ナデ、口縁部外面が平行叩き後ナデ、内面はハケ目、底部外面が板ナデ、内面はナデを施す。口径 17.3cm、器高 6.9cm を測る。30 は口縁端部が横ナデ、口縁部内外面ともハケ目、底部は内外面ともナデを施す。口径 8.2cm、器高 4.9cm を測る。32 は尖底の椀である。33 は高杯の杯部下半と脚部との接合部である。

SC-01

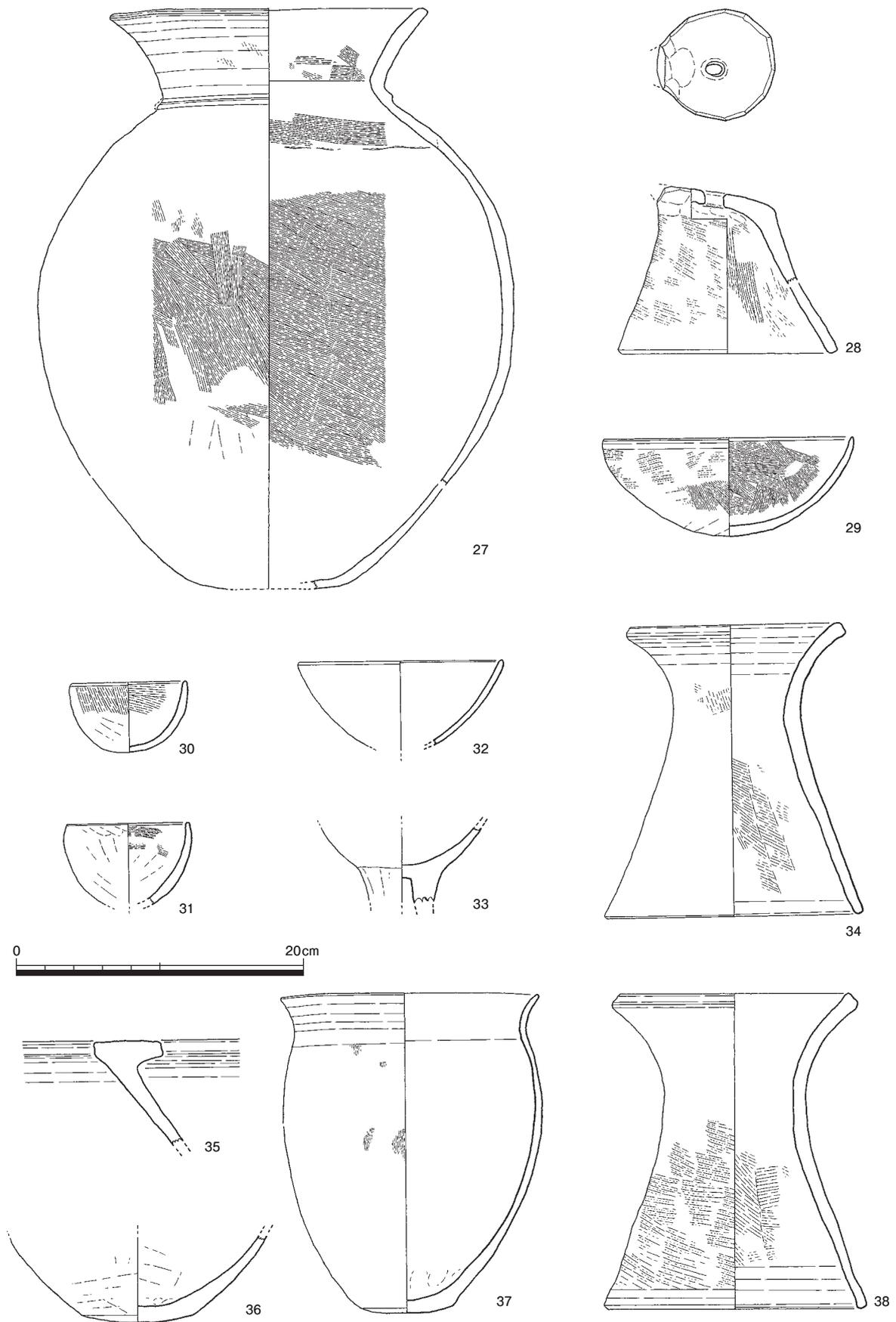


Fig.6 S C - 0 1 出土遺物実測図 1 (1/4)

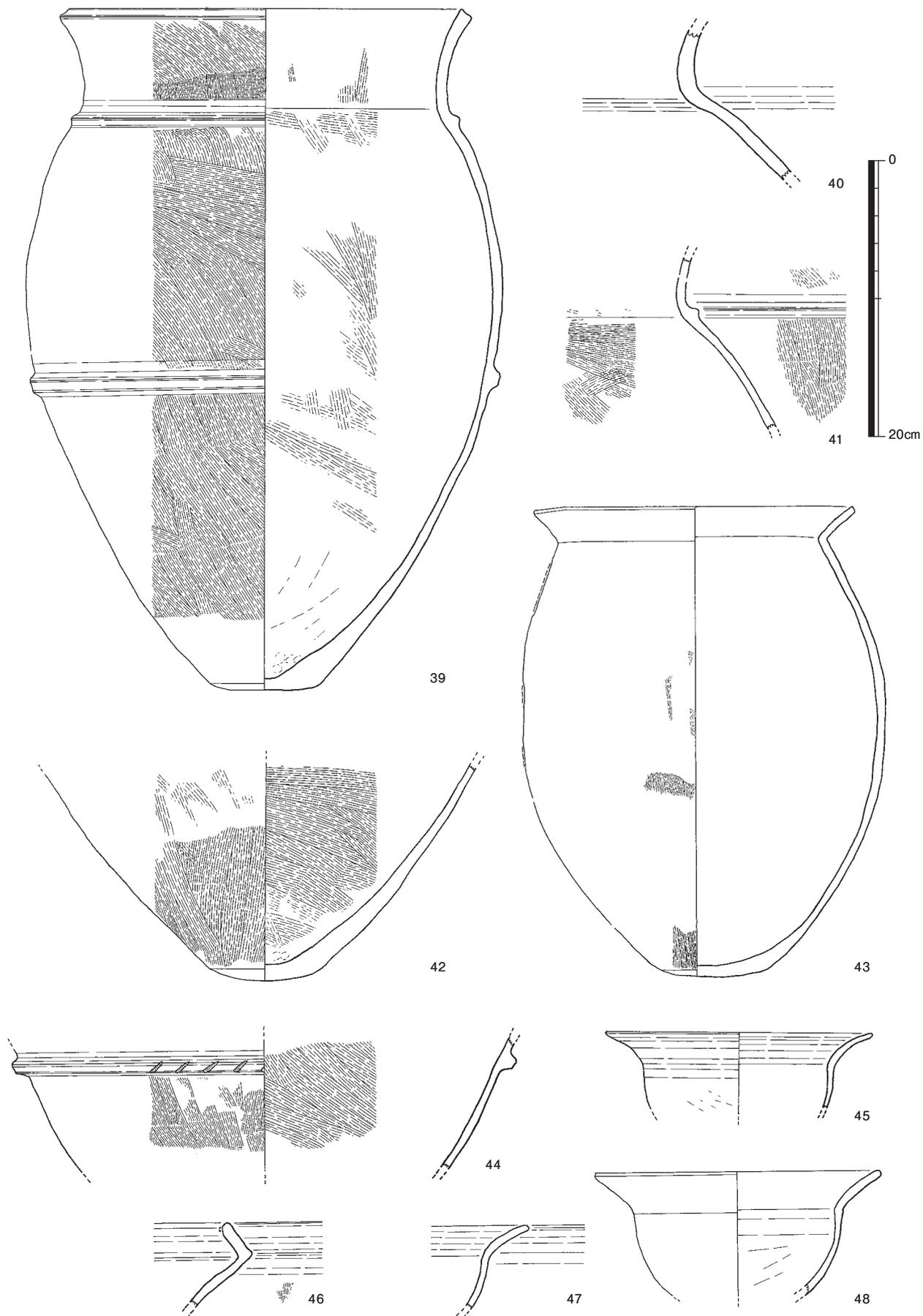


Fig.7 S C-0 1 出土遺物実測図 2 (1/4)

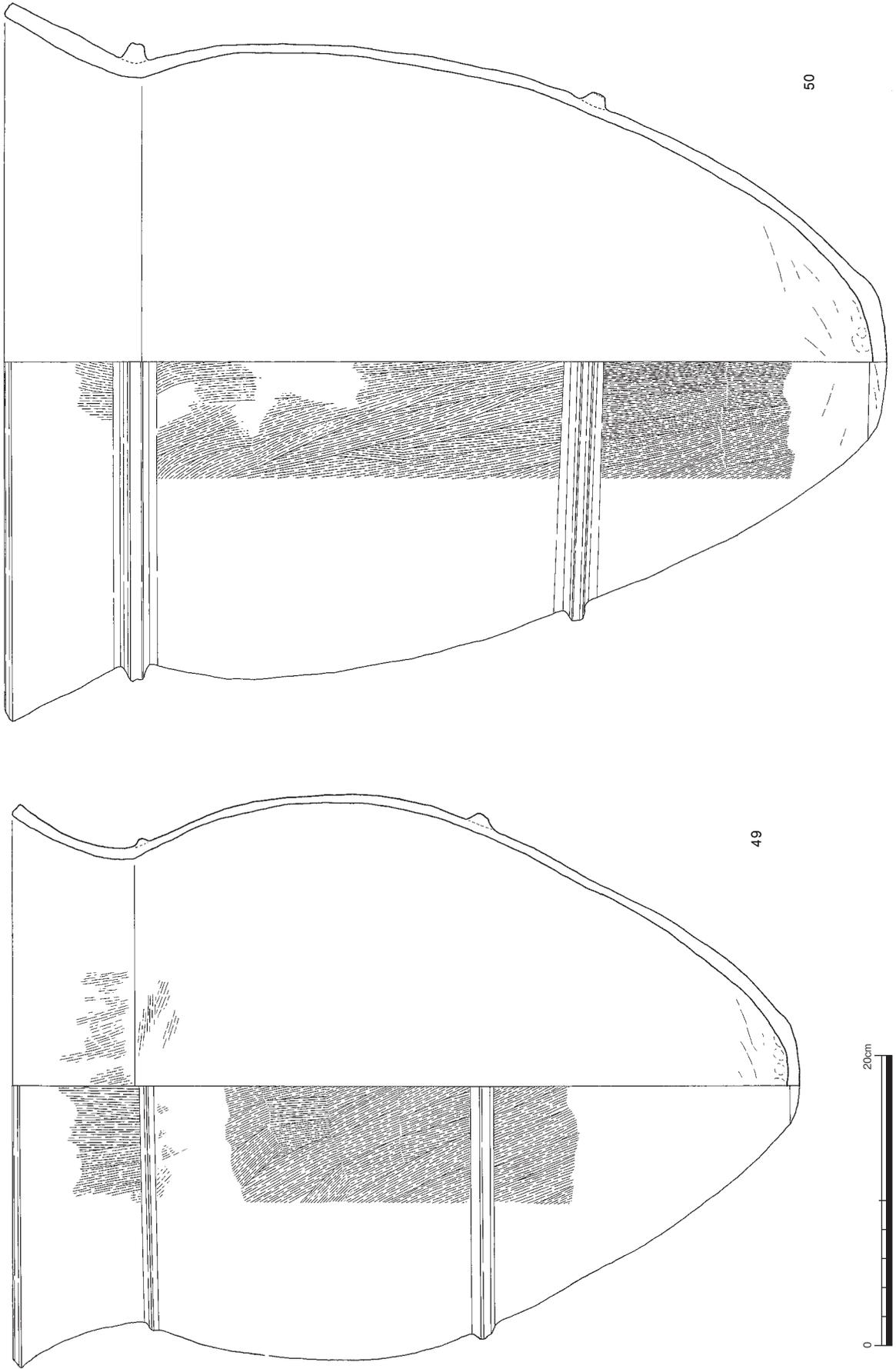


Fig.8 SC-0 1 出土遺物実測図 3 (1/4)

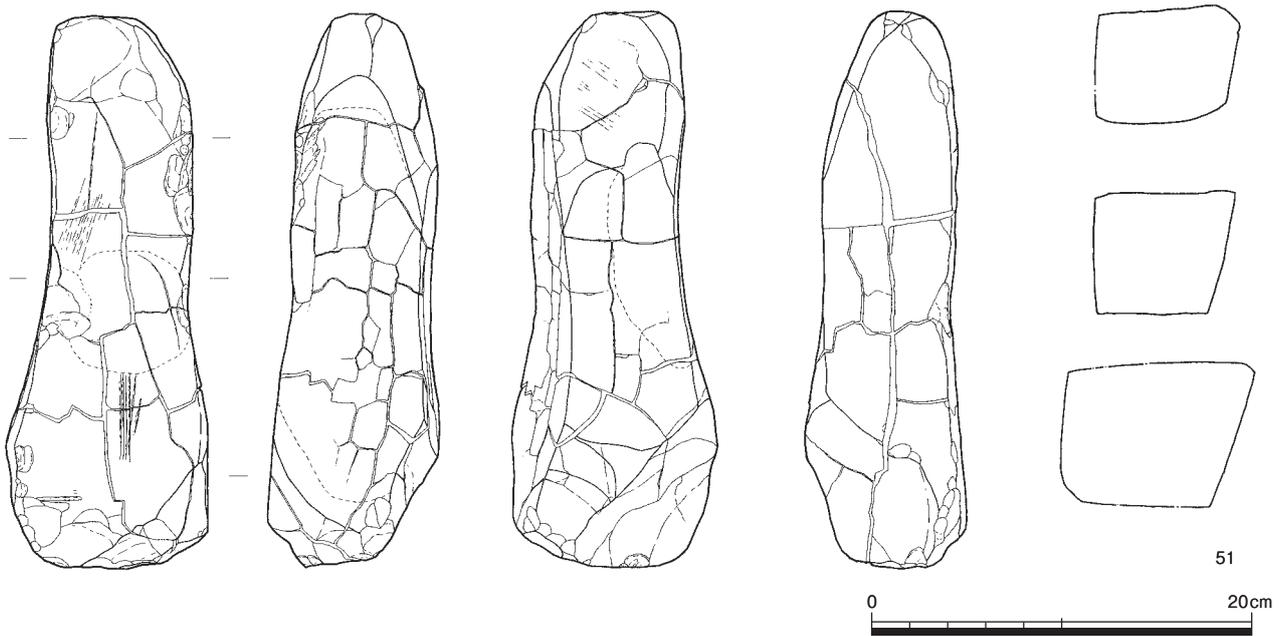


Fig.9 S C-0 1 出土遺物実測図 4 (1/4)

34・38 は器台で、34 は口縁端部が横ナデ、口縁部外面がハケ目後ナデ、内面はナデ、脚部は外面が平行叩き、内面はハケ目を施す。復元口径 17.0cm、器高 22.3cm、くびれ部径 9.7cm、脚径 18.2cm を測る。38 は口縁部内外面とも横ナデ、脚部は内外面ともハケ目を施す。口径 15.2cm、器高 20.6cm、くびれ部径 8.8cm、脚径 18.0cm を測る。

35 は大型の甕棺口縁部片である。

39・41・42・44 は中型甕である。39 は口縁部が短く外反し、胴部は倒卵形を呈し、不安定な平底をもつ。口縁下と胴部中位に断面台形の突帯を巡らせる。復元口径 29.2cm、器高 49.7cm、復元胴部最大径 33.9cm、底径 7.7cm を測る。41 は口縁下に断面台形の突帯を巡らせる頸部から肩部にかけての破片、42 は不安定な平底をもつ胴部下半資料である。44 は胴部中位に断面台形の突帯を巡らせる胴部下半資料である。突帯上には斜めの木口による刻み目を施す。

43 は小型甕で、口縁部は緩く「く」の字形に屈曲し、胴部中位に最大径をもつ。底部は不安定な平底である。口径 22.9cm、器高 34.3cm、復元胴部最大径 26.0cm、底径 7.7cm を測る。

45・47・48 は鉢で、口縁部がゆるやかに外反する。いずれも底部を欠失している。

46 は壺の稜線をもった袋状口縁部片である。

49・50 は大型の甕で、49 は口縁部が短く外反し、胴部は倒卵形を呈し、不安定な平底をもつ。口縁部下と胴部下半に断面台形の突帯を巡らす。突帯上には斜めの木口による刻み目を施す。口径 38.6cm、器高 54.0cm、復元胴部最大径 38.8cm、底径 6.7cm を測る。50 は口縁部が直線的に外へ開き、胴部は倒卵形を呈し、不安定な平底をもつ。口縁部下と胴部下半に断面台形の突帯を巡らす。突帯上には斜めの木口による刻み目を施す。口径 49.2cm、器高 60.5cm、胴部最大径 43.6cm、底径 10.5cm を測る。

51 は大型砥石で全周を砥ぎ面として利用している。全長 29.6cm、最大幅 10.5cm、厚さ 7.2～8.9cm を測る。材質は泥岩。



1) 井尻B遺跡・第13次調査全景(南から)



2) SC-01(南から)



1) S C-0 1 遺物出土状況(南西から)

Ⅲ 第30次調査の記録

1. 調査に至る経緯と調査の組織

平成19年8月1日、福岡市南区井尻5丁目143-17における埋蔵文化財の有無についての照会文書が教育委員会に提出され、これを受け同年8月17日に試掘調査を行った結果、遺構が発見された。予定建築物は倉庫で、杭打ちの計画であるため、土木工事等の施工面積129㎡について発掘調査を実施した。調査の組織は 調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課 / 埋蔵文化財第2課長：力武卓治 / 埋蔵文化財調査第1係長：杉山富雄 / 埋蔵文化財第1課事前審査係長：吉留秀敏 / 事前審査係員：藏富士寛であり、発掘調査は加藤隆也が行った。

2. 調査の概要

発掘調査は平成19年9月4日から着手し、発掘による排土を調査地内にて処理するため調査地を2区に分け、反転による調査をおこなうこととした。まず調査地北東側半分の覆土を剥ぎ、同月12日には排土を返し南西側半分の調査を始め、同月28日に調査を終了した。遺構は、現地表面から約40cm下の鳥栖ローム層上面にて検出された。検出された遺構は掘立柱建物2軒、竪穴住居4棟、土壇、ピットなどである。調査地内で基盤となるローム層は南西側に向かって標高を減じており、その上層には遺物包含層が形成されていた。

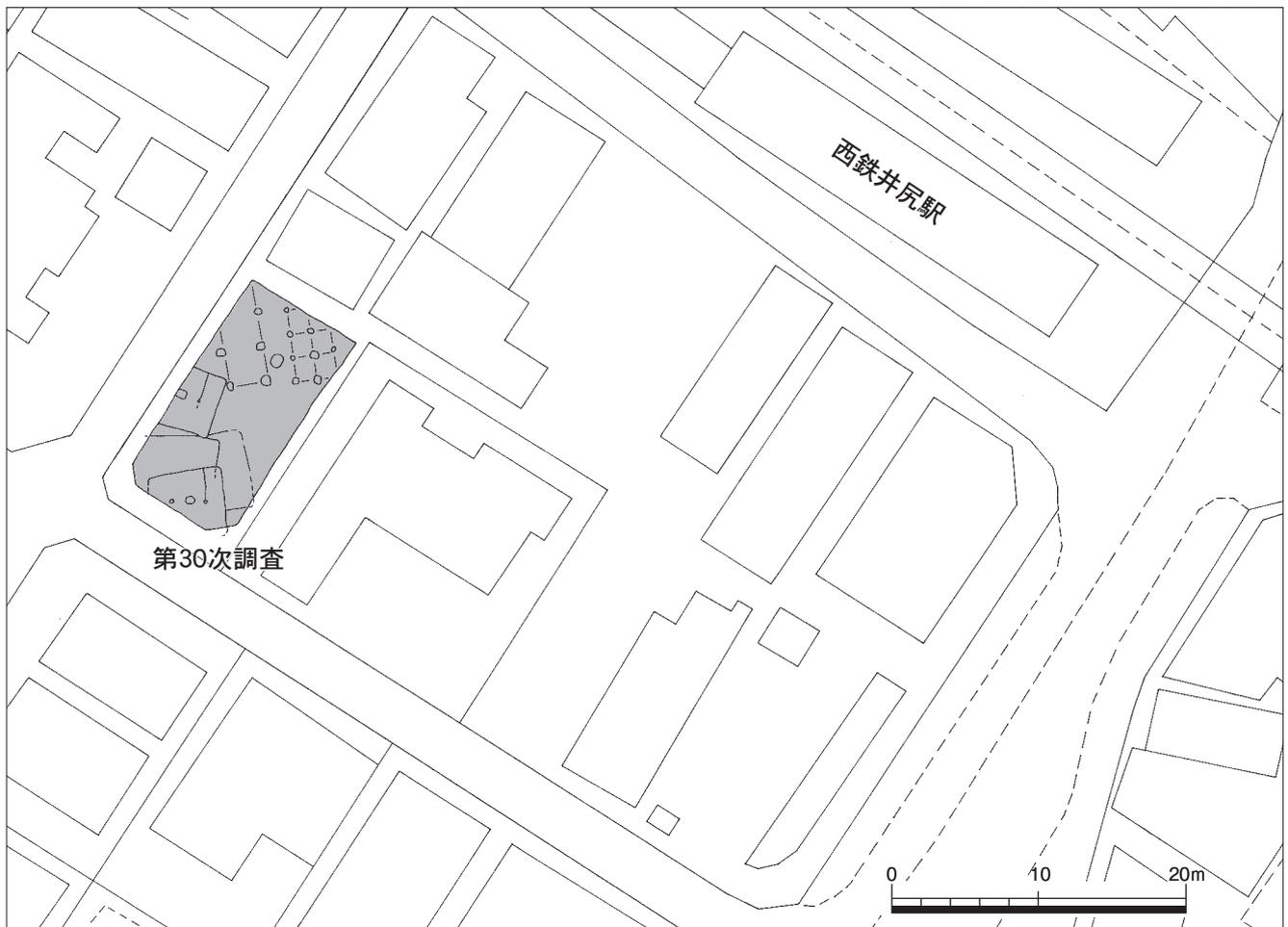


Fig.10 第30次調査地点図(1/500)

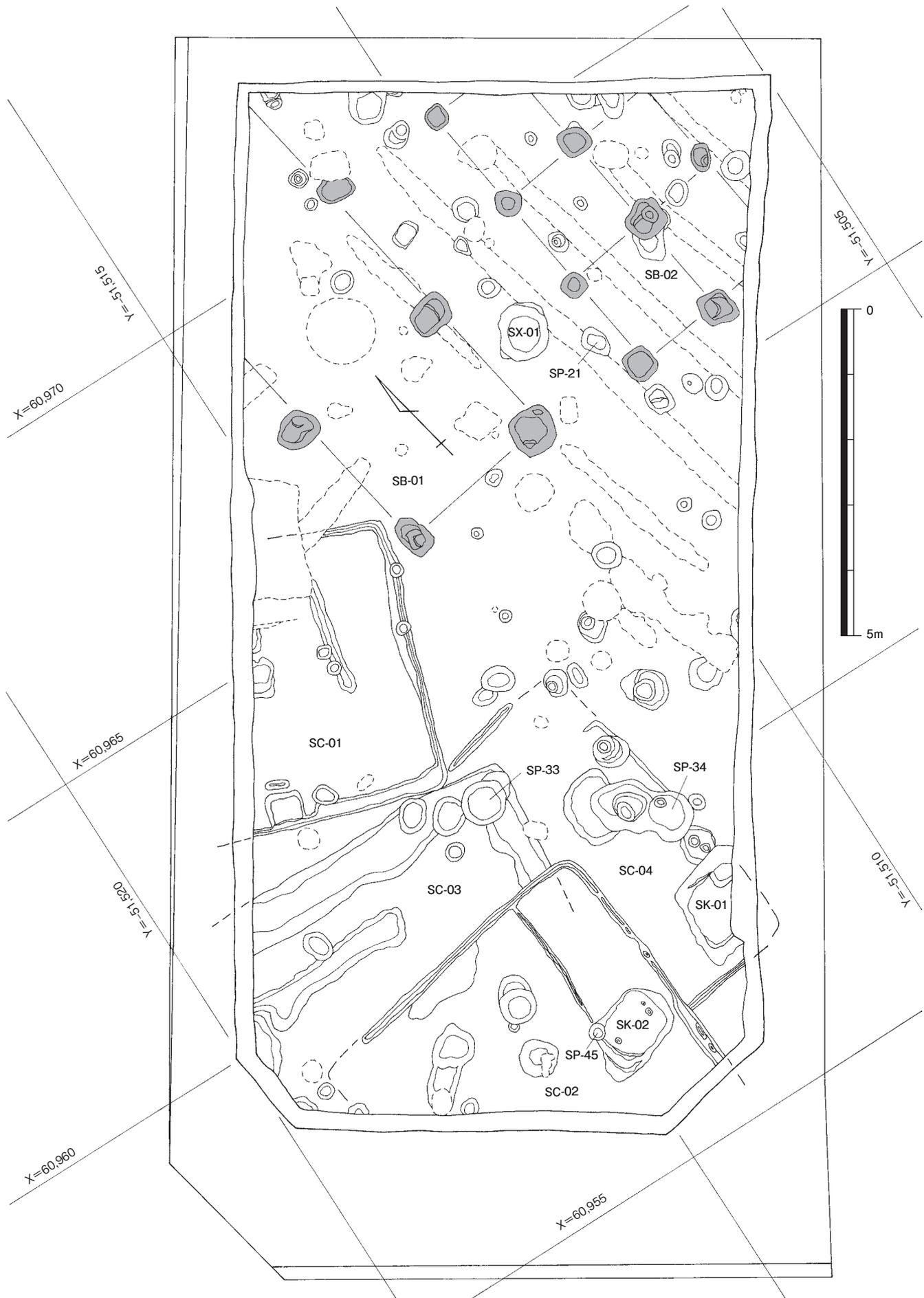


Fig.11 第30次調査遺構配置図(1/80)

3. 調査の記録

竪穴住居(S C) 調査区南西側において4棟が切り合う状況で確認された。

S C-01は調査区の中央部西端にて検出した。大きく削平を受けており、周壁溝の痕跡を残すのみであった。ベッド状遺構の範囲を限るものと考えられる南北方向の細い溝がみられ、支柱穴の1穴と考えられるピットが付設されている。調査区端には被熱し埋土に焼土を含む炉跡と考えられる土壌がみられ、住居跡南側周壁溝にも略方形の土壌がみられる。中央炉で2穴の住居跡と仮定すれば、長辺5m、短辺4.3mに復元される。**出土遺物(Fig.15)** 1は埋土中から出土した石包丁の破片である。そのほかに土器の小破片が出土している。

S C-02は調査区南端にて検出された。他の住居跡と同様に大きく削平を受けており、住居の壁際を巡る溝が確認された。S K-02を切る状況でベッド状遺構の範囲を限る溝がみられた。被熱し埋土に焼土を含む炉跡と考えられる土壌と2穴の支柱穴が確認され、このことから住居規模は長辺5m、短辺4.8mと推測される。住居の年代を示す遺物は出土していないが、切っているS K-02の遺物から古墳時代初頭期以降と考えられる。

S C-03はS C-01とS C-02の間にて検出された。遺存状況は悪く住居壁の立ち上がりが見える程度であった。他の住居跡との切り合い関係は不明であり、支柱穴、炉跡などの配置も不明である。住居の年代を示す遺物は出土していない。

S C-04は調査区南東隅にてS C-02に切られる住居である。S K-01との切り合い関係も不明であり、支柱穴など住居の構造も不明である。住居の一辺は約5.4mを測る。**出土遺物(Fig.15, PL. 3)** 2は小型の鉢である。口径8.1cm、器高3.0cmである。3は頸部が上方に直線的にのびる壺である。底部を欠損しており、口径14.3cm、復元最大胴径19.4cmである。住居床面の遺存状況は不良であるが、どちらも住居内床面上から出土している。遺構の時代は出土遺物より弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

掘立柱建物(S B) 調査区北東側において北方位にあわせた建物が2軒確認された。

S B-01は調査区北側西寄りにて検出された1間×2間以上の建物である。建物の方向は座標北より約10°西偏している。柱穴の平面形は隅丸方形のものや隅丸長方形、不定形を呈するものなど一定していない。柱穴の遺存している深さは47～72cmである。明瞭な柱痕跡はみられなかった。柱穴の掘削年代を示す遺物は出土していない。

S B-02は調査区北側東寄りにて検出された2間以上×3間以上の建物である。建物の方向は座標北より約8°西偏している。柱穴の平面形は隅丸方形のものや隅丸長方形、楕円形、不定形を呈するものなど一定していない。柱穴の遺存している深さは17～34cmである。明瞭な柱痕跡はみられなかった。また、柱穴の掘削年代を示す遺物は出土していない。

土壙(S K)

S K-01は調査区南側東端にてS C-04と切り合っただけで検出された。遺構の一部は調査区外へ広がる。平面形は130×120cmの略長方形を呈すると考えられ、深さ約70cmの壁面は一度内湾して立ち上がる。埋土の下位は地山のロームブロックを含む黒褐色粘質土で、その上面から多くの遺物が出土した。**出土遺物(Fig.17, PL. 3)** 4, 5は鉢である。4は上層から出土しており、口径は復元で17.6cm、器高は5.8cmである。5の口径は復元で22.0cmであり、どちらにも外面はナデ、内面にはハケによる調整痕がみられる。6, 7, 8は壺である。6は頸部が直線的に立ち上がる壺の上半部破片である。復元口径は14.4cmであり、胴部内外面にはハケメ調整痕がみられる。7は複合口縁の影響を有すると考えられる壺である。頸部は屈曲し、内面には指オサエ痕がみられる。胴部は球形を呈し、底部は欠損している。復元口径は14.2cm、最大胴部径は24.6cmである。内外面ともにハケによる器面調整をおこなっている。8も頸部が上方に直線的に立ち上がる壺である。復元口径14.4cm、最大胴部径17.9cm、器高13.8cmである。外面の上半はハケメ、下半にはヘラによるミガキ痕がみられ、内面はハケ後ナデによる器面調整をおこなっている。9, 10, 11は甕である。9は上層から出土した甕で、復元口径25.0cm、最大胴部径26.7cmである。口縁部は緩やかに外反し、胴部はやや長く、底部は欠損している。内外面ともハケメによる器面調整を施している。10は甕の上半部破片である。復元口径は22.8cm、残存部での最大胴部径は

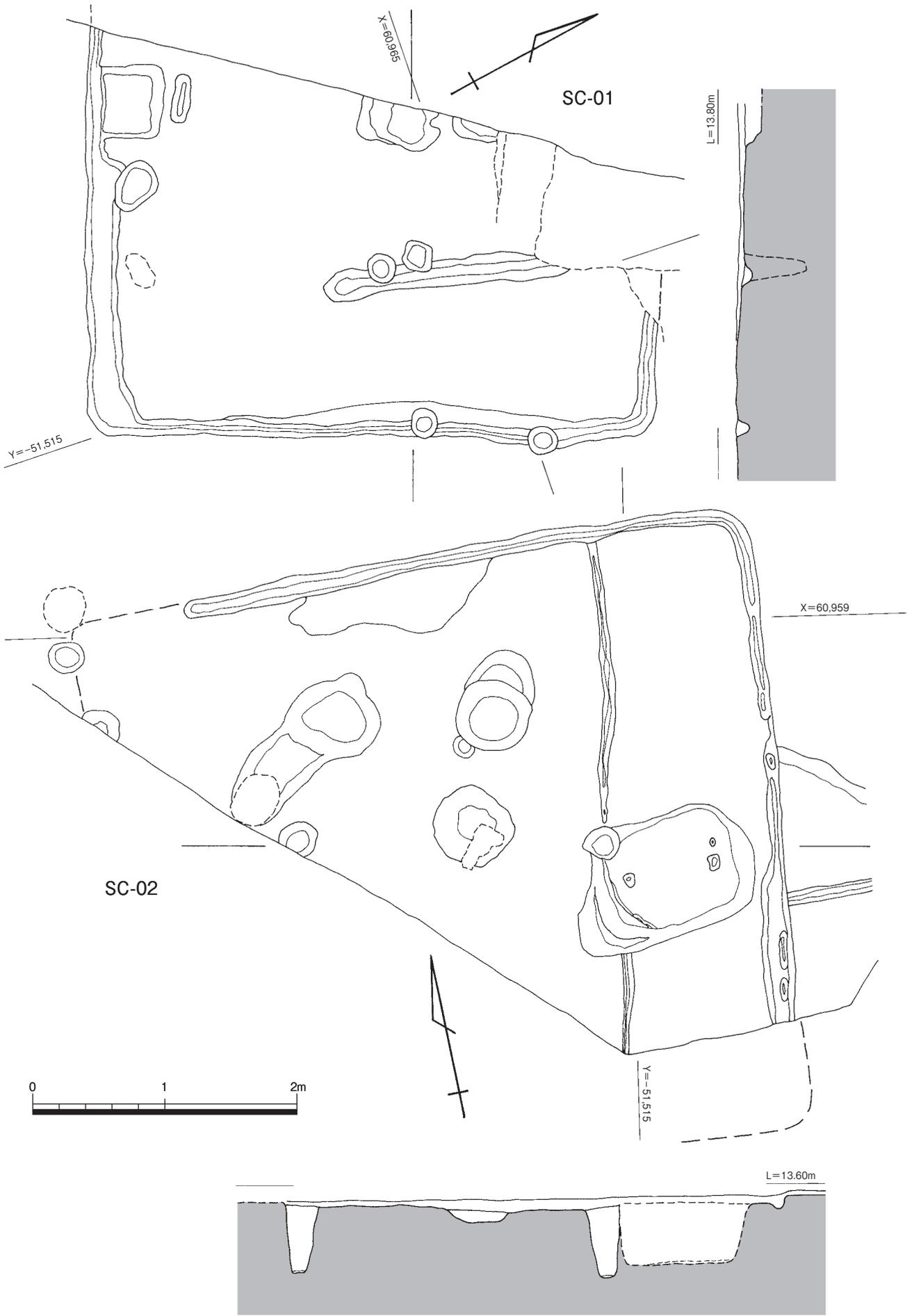


Fig.12 竖穴住居(S C)-01・02 遺構実測図(1/40)

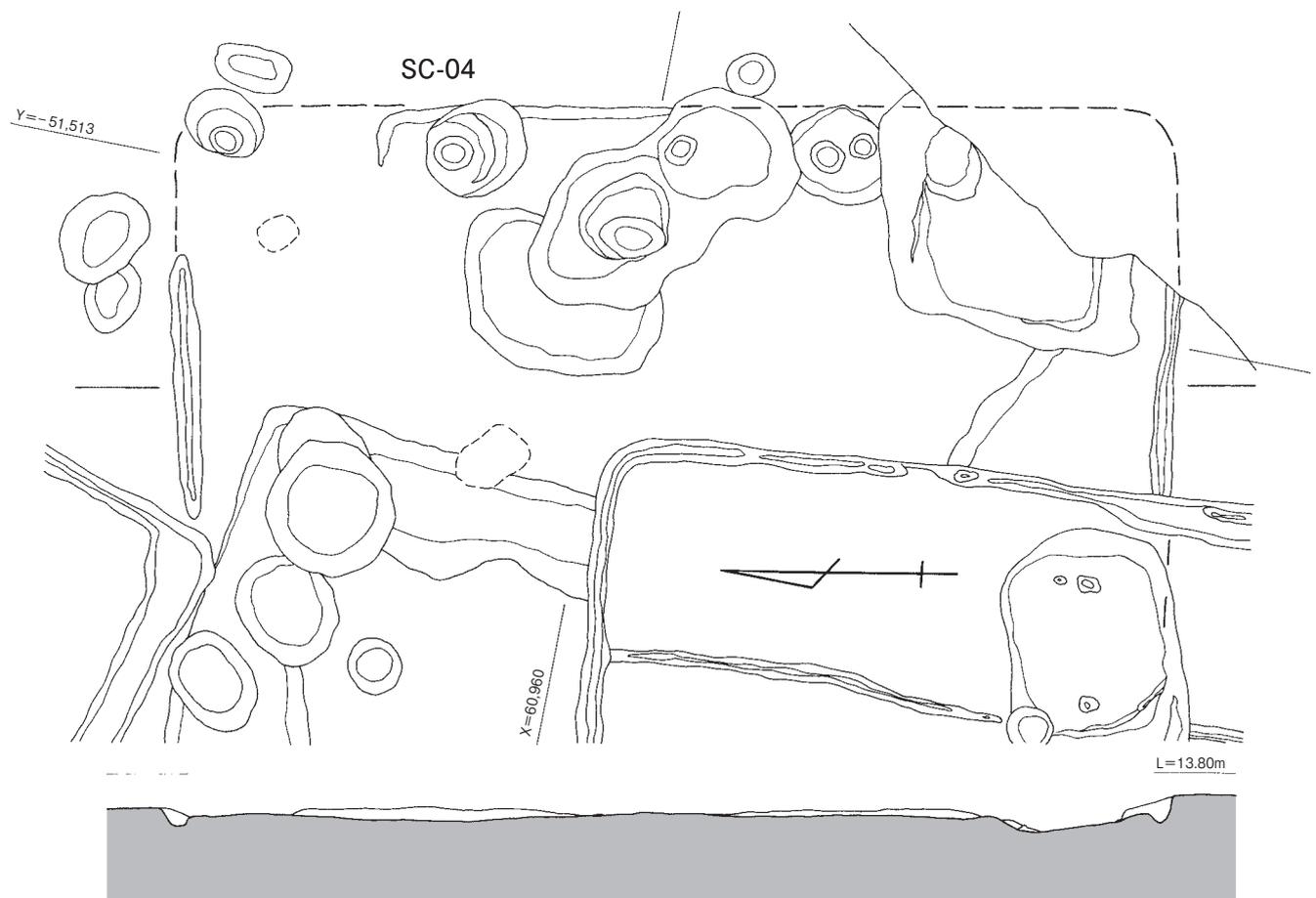
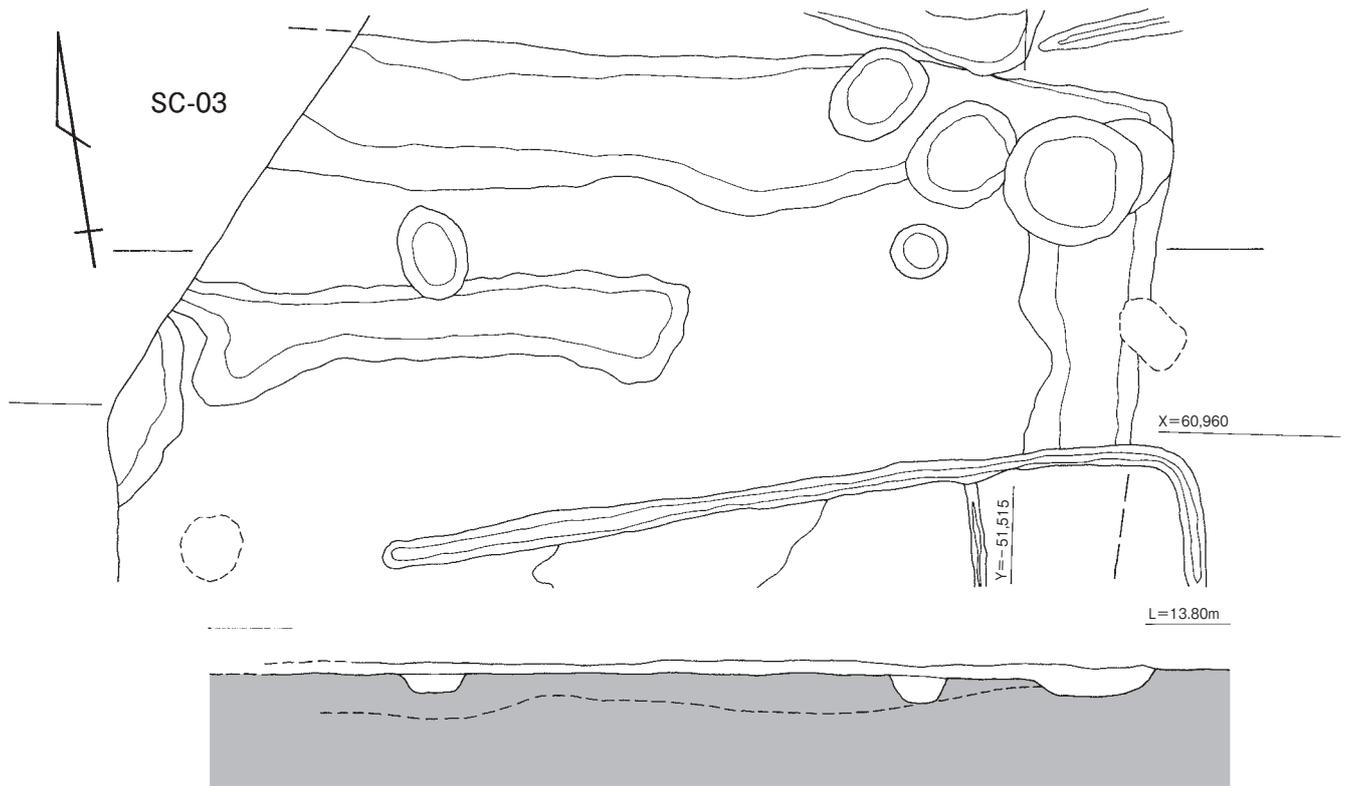


Fig.13 竪穴住居(S C)-03・04 遺構実測図(1/40)

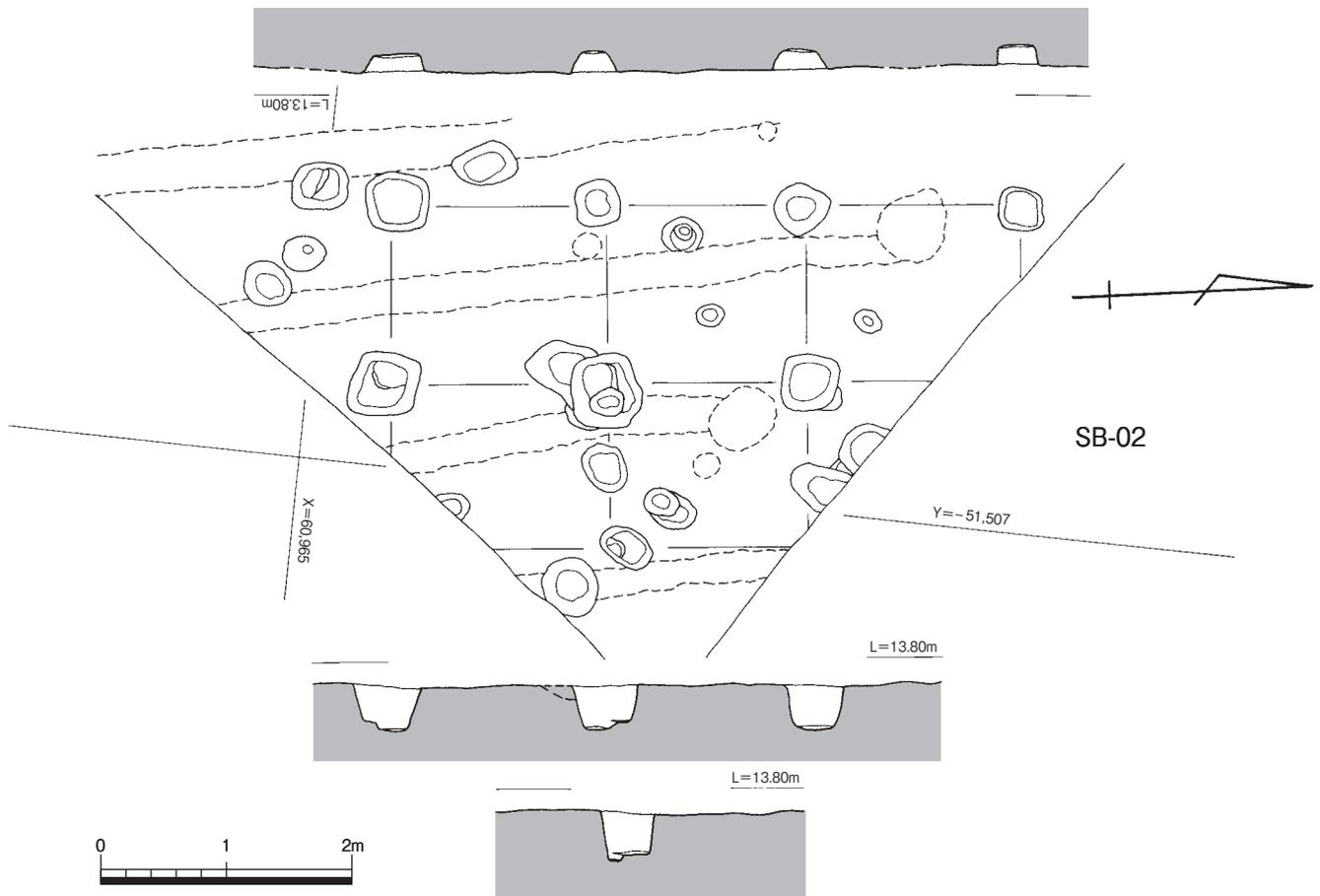
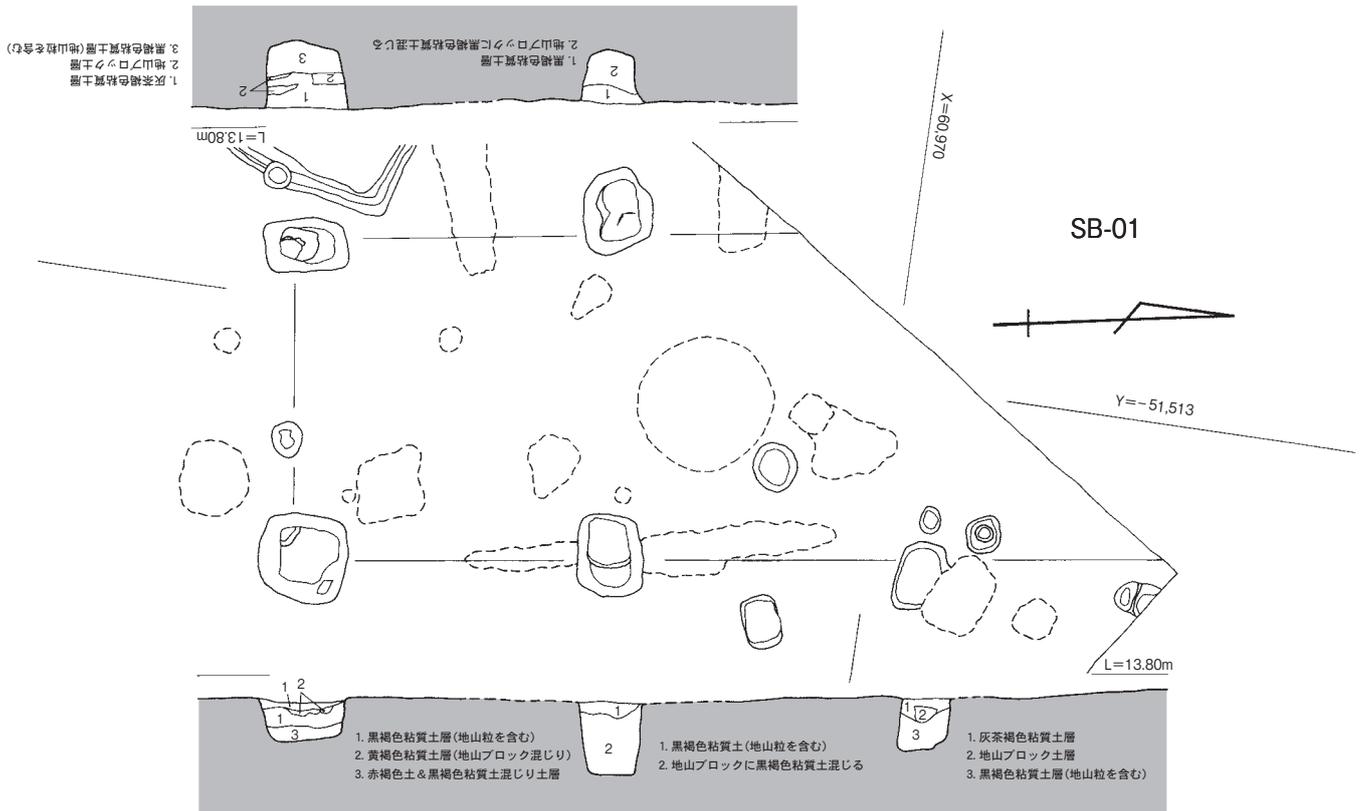


Fig.14 掘立柱建物(SB)-01・02 遺構実測図(1/60)

28.8 cmである。11は頸部が明瞭に屈曲しない甕である。復元口径は19.6 cmで内外面ともにハケの後ナデ調整をおこなっている。遺構の時期は、出土土器にやや時間幅があると思われるが、埋没の時期は古墳時代初頭と考えられる。

SK-02は調査区南側にて検出され、SC-02に切られる。平面形は130×90 cmの略長方形を呈し、深さは約55 cm遺存する。壁面の立ち上がりは西側が緩やかで、東側は直線的に立ち上がっている。遺構床面には、小径のピットがみられる。遺構からは複合口縁壺の破片が出土しているが、小破片のため図化していない。遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期ごろと考えられる。

不明遺構(SX)

不明遺構(SX)

SX-01はSB-01とSB-02の間にて検出された。上面での平面形は90×75 cmの長円形を呈し、底面は直径約50 cmの円形を呈している。深さは110 cm遺存しており、覆土は黒ボク状の黒褐色土であった。遺構内からは土器の小破片を含めて遺物が出土していないことから、落とし穴と考えられる。

その他の遺物(Fig.18, PL.3)

12はSP-21から出土した小型の甕である。SP-21はSX-01の東側に位置しており、平面形は長径50 cm、短径30 cmの不定形を呈しており、深さは約45 cm遺存している。甕の復元口径は14.4 cm、器高10.6 cmであり、内外面はハケメ、内底部にはヘラケズリを施している。古墳時代の遺物である。13,14はSP-33から出土した鉢の破片と甕である。SP-33はSC-03のコーナー部に位置しており、直径70 cm、深さ約50 cmの大型のピット状遺構である。13は復元口径15.8 cmの浅い鉢である。14は遺構の底にほぼ完形で出土した甕である。口径18.4 cm、器高20.8 cm、最大胴部径19.2 cmであり、頸部は直線的に広がる。内外面ともにハケメによる

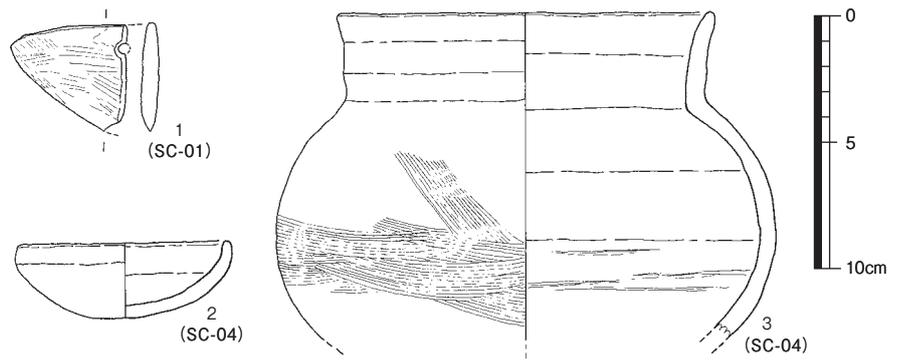


Fig. 15 竪穴住居(SC)出土遺物実測図(1/3)

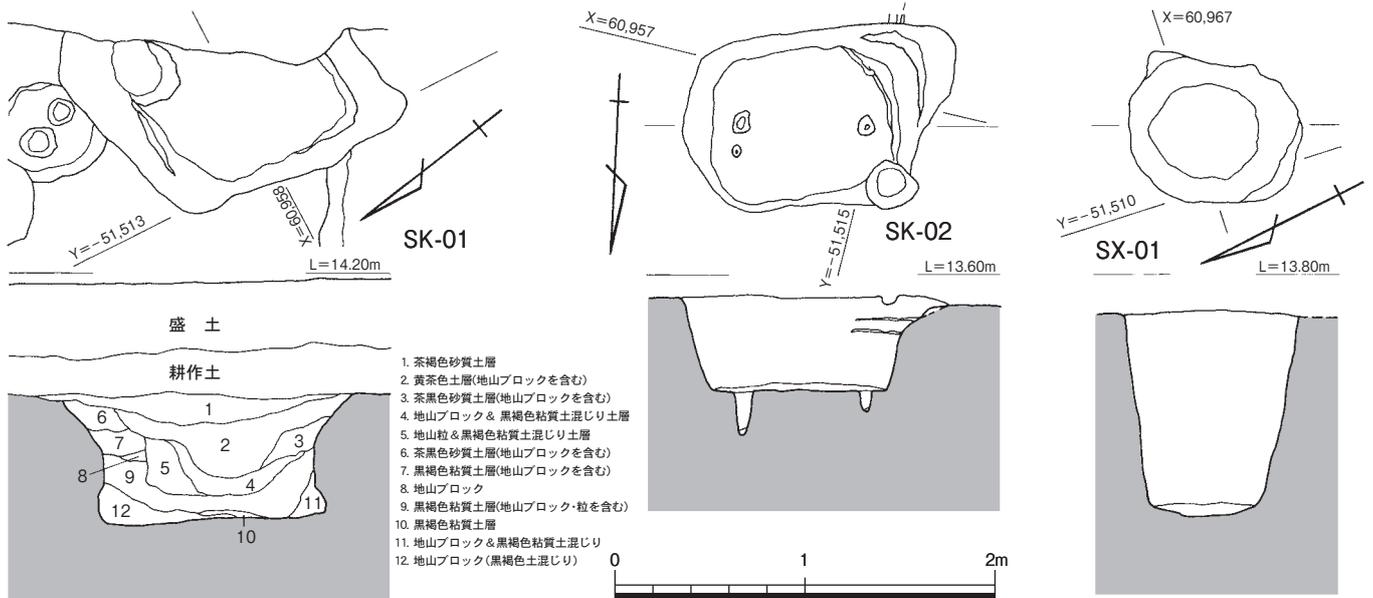


Fig.16 土壌(SK)-01・02, 不明遺構(SX)-01遺構実測図(1/40)

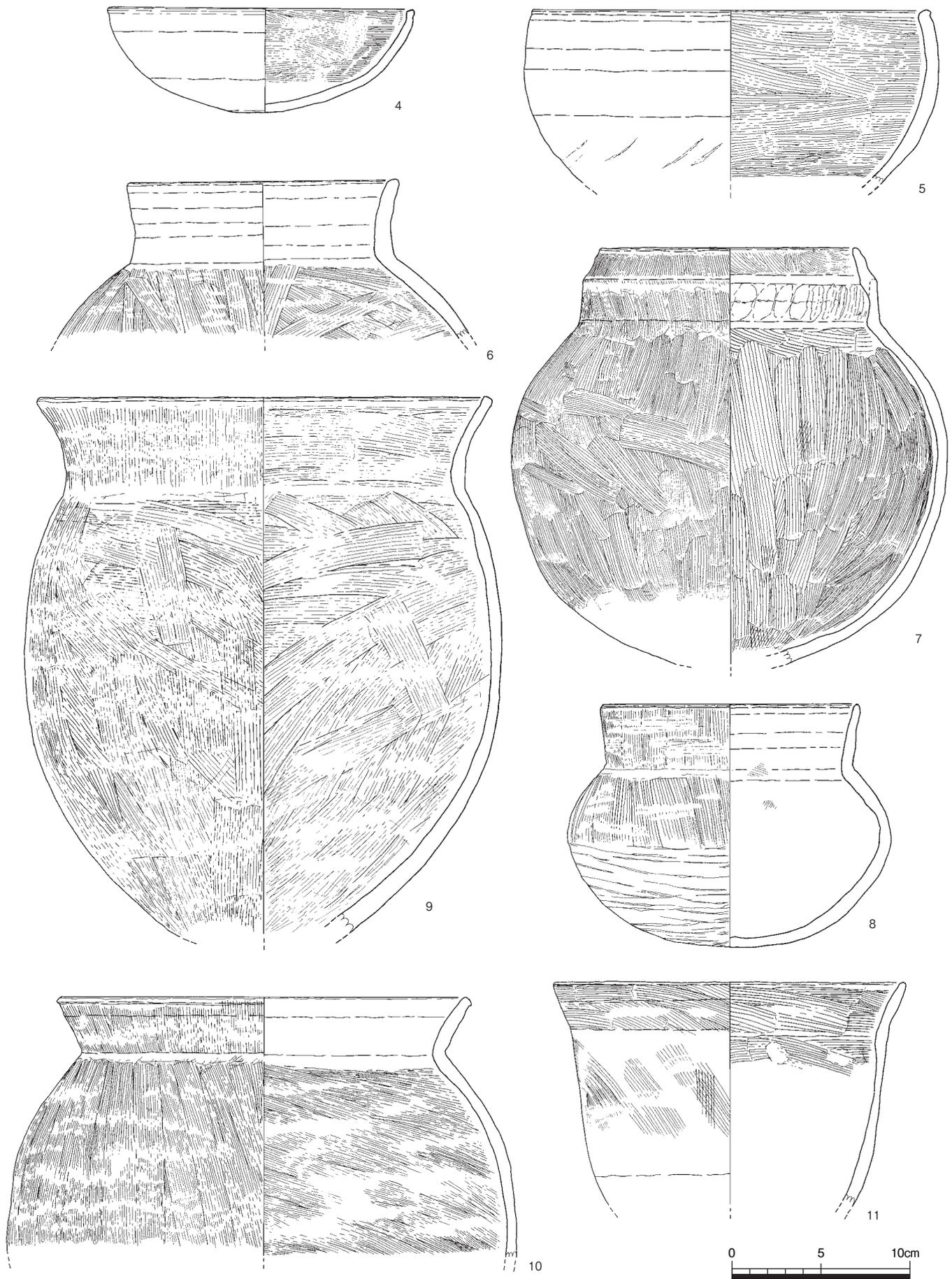


Fig.17 S K - 0 1 出土遺物実測図(1/3)

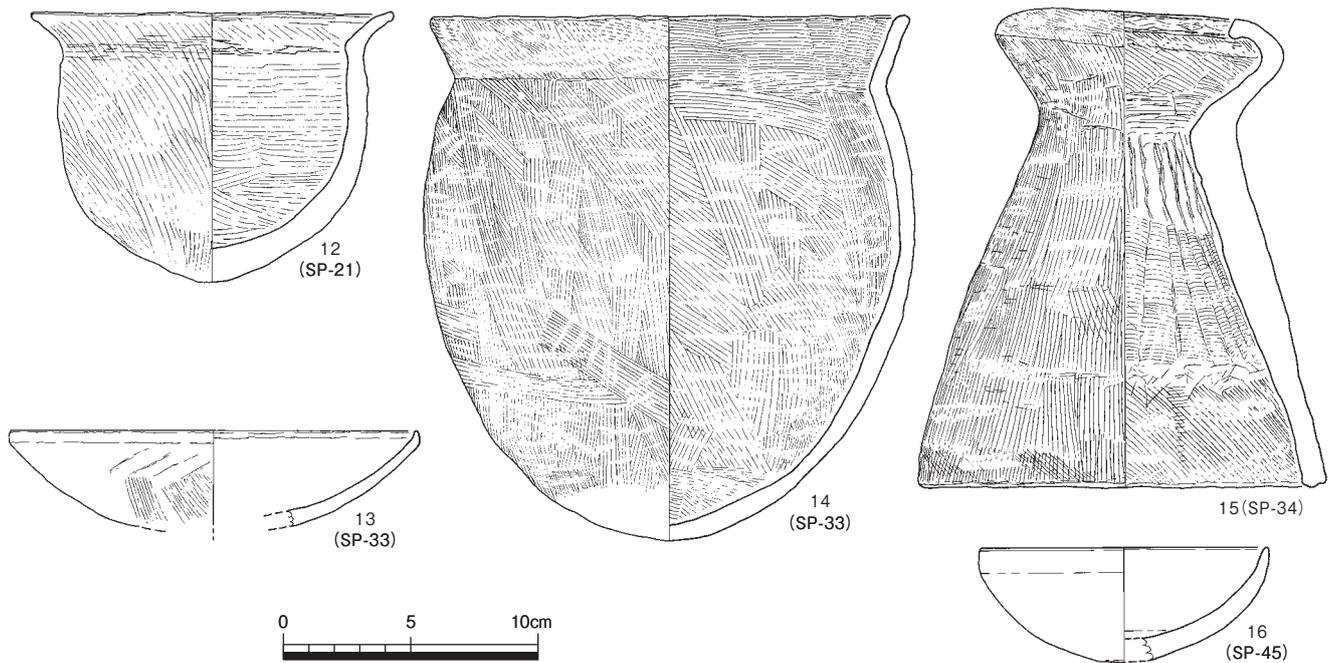
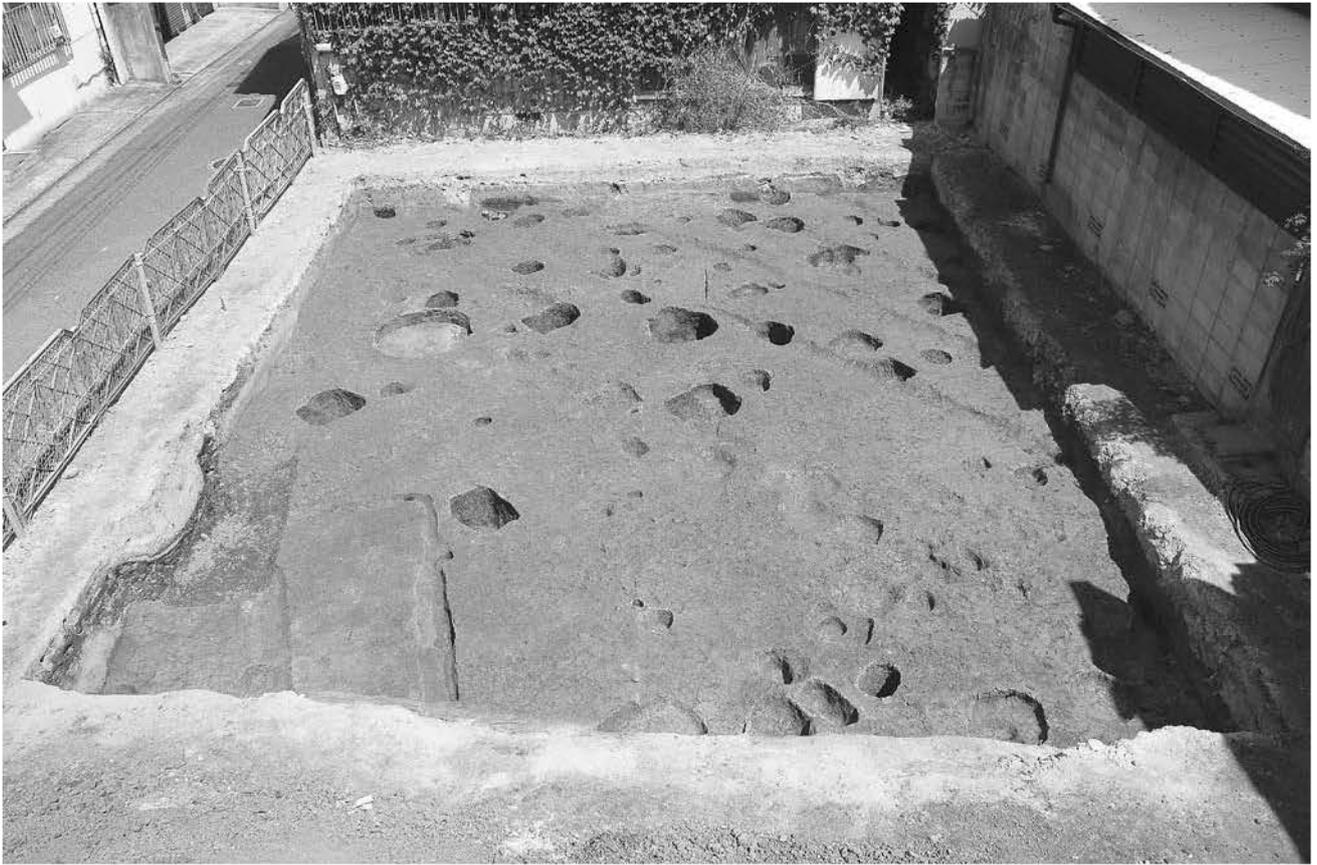


Fig.18 ピット状遺構(S P)出土遺物実測図(1/3)

器面調整をおこなっている。遺構の時期は出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。15はS P-34から出土した器台である。S P-34は竪穴住居S C-04の内側に位置しており、直径約65 cmの平面形が円形を呈し、深さ約65 cmの大型ピット状遺構である。遺構の床面にはさらに直径15 cm、深さ10 cmの凹みがある。器台は遺構床面から約10 cm浮いた位置に横倒させ、ほぼ完形の状態で出土した。口径6.7 cm、最大頭部径11.4 cm、底径15.8 cm、器高19.1 cmであり内外面ともにハケメ調整をおこなっており、内面にはシボリ痕がみられる。遺構の時期は出土遺物から弥生時代終末ごろと考えられる。16はS P-45から出土した小型の鉢破片である。S P-45はS C-02の主柱穴と考えられているピットである。復元口径11.0 cm、器高4.5 cmであり、底部は小さい平底を呈している。内外面に丹塗りをしている。弥生時代の遺物であるが、小破片で柱穴遺構出土のため直接住居の年代にはあてることができない。

4. まとめ

今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭ごろの集落と、古代と思われる北方位に建物方向を揃えた建物群を検出した。西鉄井尻駅の南側に隣接する今調査区が位置する街区では、発掘調査例が無く各時代の様相が不明であった。今回の調査結果から、井尻B遺跡内で普遍的にみられる弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落が、駅周辺を含めて濃密に分布していることが明らかになった。また、北方位に建物方向を揃える建物群に関しては、遺跡内では7世紀後半から8世紀前半にかけて井尻廃寺の存在が指摘されており、何らかの関連施設の一部である可能性が想定される。遺構内から当該期の遺物は出土しておらず、瓦などが出土する寺院跡も北西方向に約100 m離れている。仮に同時期の建物群であっても、直接井尻廃寺を構成する建物とは考えられない。今回の調査区は狭小なものではあったが、弥生時代、古墳時代集落の広がりとその消長や、古代における井尻駅周辺の状況を解明することにおいて貴重な成果を得ることができた。今後周辺で行われる発掘調査の成果に期待したい。



1) 調査区北東側遺構掘削状況 (南西から)



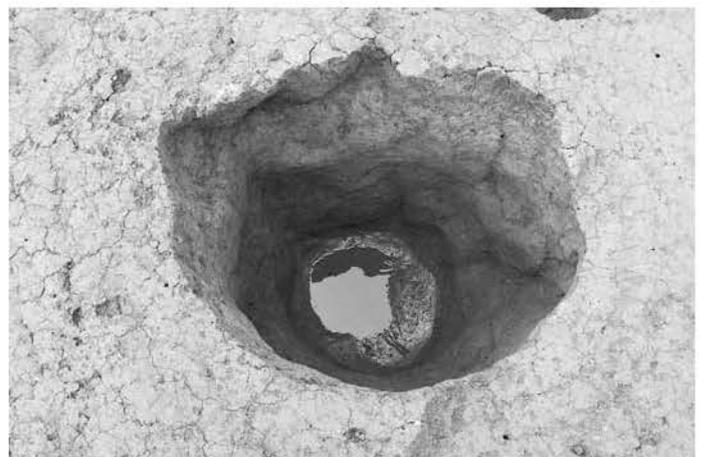
2) SC-01 北東側掘削状況 (南西から)



3) SB-01 掘削状況 (南から)



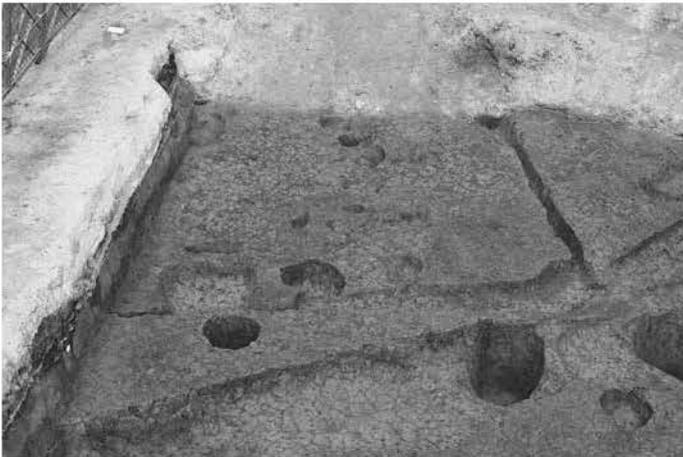
4) SB-02 掘削状況 (東から)



5) SX-01 掘削状況 (南東から)



1) 調査区南西側遺構掘削状況（北東から）



2) SC-01 南西側掘削状況（南西から）



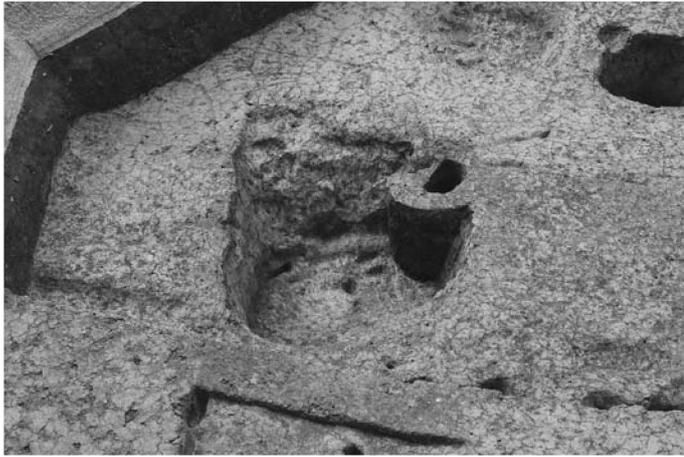
3) SC-02 掘削状況（東から）



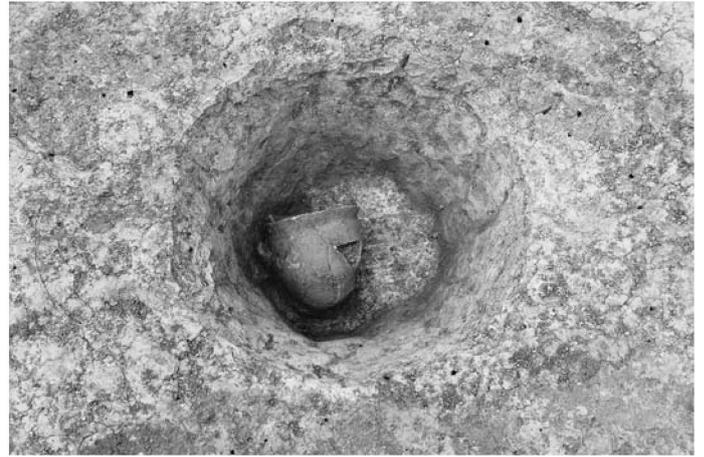
4) SK-01 土層堆積状況（西から）



5) SK-01 掘削状況（東から）



1) SK-02 掘削状況 (東から)



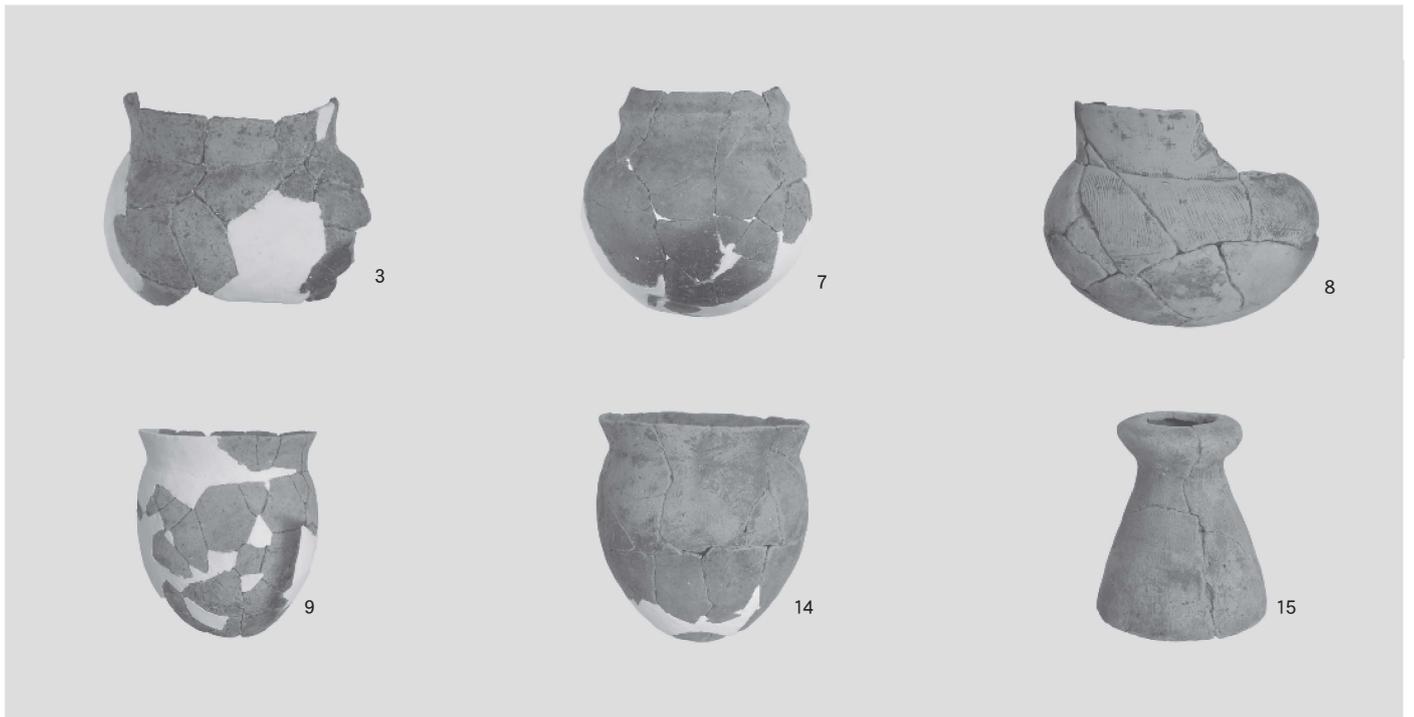
2) SP-33 遺物出土状況 (南東から)



3) SP-34 遺物出土状況 (南西から)



4) 発掘調査風景 (南から)



5) 出土遺物 (縮尺不同)

— 報告書抄録 —

書名 井尻B遺跡21
ふりがな いじりBいせき21
副書名 第13次, 第30次調査の報告
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 第1216集
編著者名 加藤隆也(編集)、佐藤一郎
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20140324
作成法人ID 40130
郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号
遺跡名 井尻B遺跡
ふりがな いじりBいせき
市町村コード 40130
遺跡番号 0094

	— 第13次調査 —	— 第30次調査 —
遺跡所在地	福岡市南区井尻1丁目755-8	福岡市南区井尻5丁目143-17
北緯	33° 33′ 21″	33° 33′ 08″
東経	130° 26′ 28″	130° 26′ 32″
調査期間	19991122 ~ 19991211	20070904 ~ 20070928
調査面積	60 m ²	129 m ²
調査原因	住居建設	倉庫建設
種別	集落遺跡	集落遺跡
主な時代	弥生時代終末から中世	弥生時代終末から古代
遺跡概要	竪穴住居1棟, 溝, 柱穴	竪穴住居4棟, 掘立柱建物2軒, 落とし穴
特記事項		北方位に揃えた建物2軒

井尻B遺跡 21

－ 第 13 次, 第 30 次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1216 集

2014 年 3 月 24 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 有限会社 西菱
福岡市早良区次郎丸 1-7-1
